

特別講演

『ポンペ・ファン・メールデルフォールトによる

日本初の近代臨床検査医学講義』

長崎大学名誉教授（医学部生理学、医史学）

日本赤十字社長崎原爆病院・検体検査管理医

相川 忠臣



長崎大学医学部の開祖 J. L. C. ポンペ・ファン・メールデルフォールトは 1857 年第二次海軍伝習の教官として長崎に赴任し、近代西洋医学の伝習を開始した。松本良順と協力して近代西洋式病院養生所を 1861 年に建設し、日本に初めて系統的な近代西洋医学教育を植え付けた人である。『朋氏吉利仁幾（クリニク）備忘録』は順天堂大学医学部医史学教室にある。前半は日本人症例であるが、後半のホヘー（ポンペ）幾里仁幾はオランダ人の臨床症例であり、その末尾に臨床検査学の講義がある。これによりポンペによる日本初の近代臨床検査医学の伝習内容がわかった。

ポンペが 1862 年内科臨床講義を終わるにあたり面目を一新しつつあった近代臨床検査学を追加すべきと強く感じていたことが序文からうかがえる。「汾泌排泄中に顯わる有無両機分を専密術及び顯微鏡を以て之を検査し病徵を説（く）」という題で始まり、有機無機両成分 18 それぞれに試薬、試薬検査、顯微鏡検査、驗證、病徵が簡潔に述べられている。化学分析検査と顯微鏡検査を併用して病気を診断する高度な内容である。その項目を列挙すると、尿酸、蛋白、安没尼亜機、尿無形澱渣（安没尼亜機、尿酸加爾（ル）基、磷酸加爾基、炭酸加爾基、加爾基塩）、脂肪球、ヒリフーイネ(biliphaine, biirubine)、血液、血圈（血球）、膿圈、膿液、エピテリウム、纖維原、炎球、磷酸安没尼亜麻届涅失亜、精虫、糖尿、尿素、脂肪である。血球を白色血球と赤色血球に分け、炎球（多核白血球の特徴をもつ）も登場する。尿酸や尿素の顯微鏡的尿所見の重要性を述べ、尿酸はリューマチ、痛風、間歇熱で上昇、尿素は長期の腎臓炎で上昇するとある。尿崩症と糖尿病の尿の鑑別、コレステロールの動脈への沈着にもふれている。師 HarmenBeukers 教授の論文引用文献に C. Gobée, “Tabel, bevattende enige organische en anorganische zelfstandig- heden, welche in de se- en excretiën voorkomen, derzelver scheikundige en microscopische onderkenning, benevens toepassing op ziektekunde”, *Kliniek; Tijdschrift voor wetenschappelijke Geneeskunde* 『クリニク：科学的医学雑誌』 (*Kliniek* と略) 1 (1844) 105–131. を見つけ、蘭文表題の和訳が上記題に一致するのに気づいた。内容を調べると、18 の有機無機両成分各々の試薬、試薬検査、顯微鏡検査、驗證、病徵が表 Tabel に纏められていた。*Kliniek* は臨床検査学講義の原典にとどまらず、ポンペの臨床講義のオランダ人の 12 臨床症例も *Kliniek* の 1 卷と 2 卷からの引用であった。ホヘー幾里仁幾は 1. 内臓痛治験、2. 善飢病、3. ベリフト病（水腫の一種）に沃顛を用いる治験、4. 慢性下利治験、5. 腹臓第扶斯治験、6. 肺炎衝重症治験、× 7. 産婦陰唇に発する血瘍治験、8. 聖京偏性腸胃熱の第昆私に罹り気管枝及肺炎衝を兼る者、9. 劇烈肺炎脳中髄血を兼る者、10. Pleuro-peripneumonia subacuta、11. Asthma spasmodicum、12. 死臓解剖の記（第 11 症例死後の病理解剖）、13. 下痢症・大便顯微鏡検査診断、計 13 症例である。× の 1 例のみ *Kliniek* 1, 2 卷に見当たらない。各症例で血液、尿、便、膿液、喀痰等の化学的検査と顯微鏡所見が活用されている。1843 年にドイツの F. Simon が『生理化学、病理化学と顯微鏡検査の臨床医学応用雑誌』を発刊した事に触発され、C. Gobée がユトレヒトで *Kliniek* 4 卷(1844~1849) を出版した。ポンペのユトレヒト陸軍軍医学校在学中に使用された本であろう。ポンペは誕生したばかりの“科学に基づく近代内科学”を日本に伝えた。